議員のひとりごと

議員の役割の一つに住民一人一人の願いを聞いてその生活を守ることがある。住民はそれぞれの考えがあり、各人各様の価値観に基づいて行動する。

こういう中で議員は住民のみなさんから相談を受けると、よほどのことがない限り、なんとか願いを実現できるよう村役場へかけあうはずである。そこでことがうまく進めば目出たし目出たしで一件落着となるが、現実は往々にして暗礁に乗り上げる。権利意識の高まりとともに生じる価値観の多様化、これが難問だ。

のっけから雲の上を歩くようなつかみどころのない話になってすみません。具体的に申し上げます。例えば住民から道路の一角が暗いので街灯を付けてほしいと相談を受けたとする。議員はもっともだ、と理解を示し、早速、村の担当者と話をつけ実現の運びとなる。担当者が下見に現地を訪れると近くの住民が家の前に付けてもらうと困る、明るくなると夜、眠れなくなる、と強硬に反対する。さらに別の議員を通じて村役場へ申し入れる。

このような事態になった場合、それぞれの議員はどうしたらいいんだろう？どうしてこのようなことが起きるかというと、全体に対する目くばり、これが欠けているせいのように思う。ここでは地域社会（コミュニティ）ということになる。全体と個、両者のバランスをいかにとるか。私たちは一人では生きていけないが、かといって全体のために個人が犠牲になるのはおかしい、と。両者のせめぎ合いの中、いかに解決を図るか？妥協の余地はあるかもしれない。街灯の位置をずらすとか、深夜は消すとか、そういうことはできるかもしれない。

結論めいたことになるが、両者の接合点、地域社会の一員としていかに生きていくか、ここにヒントが隠されているように思う。これを基軸に利害関係人の歩み寄りを図れないか？その際、再び議員の活動する場面が出て来るだろう。

小さな一つ一つの成果を積み上げ、実績を作っていく、ここに確固たる地域に根ざした民主的社会が構築される、そう信じたいのだが、楽観的過ぎるだろうか？

編集後記

10月の下旬に議員の広報研修があり、これに参加した。毎年実施され東京の砂防会館を会場に全国の町村議員400名ほどが参集。

研修の目的は議会広報の作り方ということで各方面の専門家の講演、実際の町村の広報を教材に批評する、といったことが行われた。

教材を提供した町村の広報は10紙ほどで、それぞれ自信作らしく見た目にもよくできていた。表と裏面は全てカラー。一面は全面写真が多く児童、親子が被写体といったもの。2ページ以降は写真、見出しを多用し、読んでもらうための工夫が感じられた。

当議会の広報は本会議における一般質問とその回答を要約したものが紙面のほとんどを占め、即時性と内容の深掘りのどちらも未達の感を否めない。このため今回は議員は何を考えているか、上記コーナーを設けて立体的な紙面作りを試みた。

今後は議会の各種委員会の活動報告など内容を充実させていきたい。みなさんの議会への要望、意見を歓迎しますので、ぜひ御投稿を。

●広報委員長　山本　均